

抄録

「アメリカで学んだインプラント治療を日本の歯科治療に生かす」

現在、インプラント治療は欠損補綴治療のオプションとして、幅広く普及している。しかしながら、ここ日本の場合、国民皆保険を使った欠損補綴治療では、ブリッジか義歯を選択することが一般的である。約20年前にアメリカで学んだインプラント治療は、当然のことながら保険治療の選択はなく、科学的根拠や最適とされる治療計画が立案され、臨床的な予後を考え治療を行っていた。その時代、インプラント治療は天然歯を保存することよりも予知性が高く、精度の高い最先端治療として考えられており、様々な材料やテクニックが幅広く検証されて今日のインプラント治療の基本となってきた。

インプラント治療の予後に対してインプラント周囲炎や補綴的合併症の発症が考えられるようになり、必ずしもインプラント治療が絶対的第一選択という考えではなくなってきた。今日の私の臨床では、日本の国民皆保険を一般歯科診療と考えて、欠損補綴治療に専門的なインプラント治療を取り入れていくように治療計画を立案している。本公演では、歯牙保存の選択基準、抜歯からインプラント治療における暫間修復の重要性、そして天然歯とインプラント補綴設計について考察したいと思います。